

明昌二年碑文

「太上玄靈北斗本命延生經」について

山田 俊

はじめに

陳垣編『道家金石略』（文物出版社、一九八八年）は、繆荃孫『芸風堂拓片』に依り、金・明昌二年（一一九一年）の奥書を持つ石刻資料「太上玄靈北斗本命延生經」（以下「明昌碑文」と略す）を収める。『道家金石略』に依れば、本碑文は完県（現在の順平県）西北十里白雲村の玉皇廟に在るとされるが、末尾欠損のため、完県にて立石されたのか、他処から完県に移されたものかは不明である。この石刻資料は明確な奥書を持つ点で注目される。金朝期に流布していたことの確証が得られる道教文献が限られている中、本資料は明昌二年に斯かる内容の文献が金朝に受け入れられていたことを確認できるからである。

「明昌碑文」を巡る状況を確認しておくならば、『道蔵』は本碑文に該当する『太上玄靈北斗本命延生真經』無注本と三種の注釈本を収め、『蔵外道書』は別系の無注本を収める。更に、三浦国雄氏により、本邦「若杉家

文書」に南宋・謝守灝の校勘作業を記録する自「序」を冠した写本が伝来していることが報告されている。⁽¹⁾『太上玄靈北斗本命延生真經』（以下『延生真經』と略す）は、「本命」の概念を軸に、北斗・北辰に対する信仰と長生の追及をテーマとした短い經典で、多くの道教文献が引用する。⁽²⁾「明昌碑文」の存在は、こうした北斗・北辰に関する道教經典が金朝に於いて歓迎されていた一つの証左と言えよう。

今、「明昌碑文」と『道蔵』諸本・『外』を比較すると、細かい文字の異同は見られるものの、經文の文言は基本的にほぼ一致している。しかし、その全体の構成は、「明昌碑文」と『道蔵』諸本とでは前後の順が大きく異なる。そして、『外』は構成の点では「明昌碑文」と一致している。⁽³⁾本論はこの「明昌碑文」に就いての若干の整理を試みるものである。⁽⁴⁾

一、「明昌碑文」と『無注』について

前述した様に、「明昌碑文」は『道蔵』諸本と全体の構成が大きく異なる上に、文字の一部が欠損している。しかし、諸本を参照することである程度の復元が可能である。その復元に基⁽⁵⁾づいて内容を概観すると次の様になる。

太清天の太極宮に居る大聖老君が分身して蜀都に降

臨し、天師道陵に「北斗本命経訣」の教えを伝授する。人々が正道に出会えない理由、輪廻から離脱する教え等を説き、個々の衆生の本命の日に正一道士によつて齋醮を行い北斗真君の名号を唱えることで罪業は消えると説く。次に「北斗真君応驗」を紹介し、家に『北斗経』を備えることの功德を述べる。そして、北斗に投告し北斗真君に醮謝し、真経を転読することで、危厄は解消されるが、こうした功德を積まないと天司によつて天命が削られると説く。ここで太上の説法は一旦終わり、天師がこの教えを流布させることを誓願する。最後に「北斗呪」を唱えて誓願が終わると、改めて道君が「北斗命延生経訣」の功德を説き、「大聖北斗救苦神呪」を紹介する。これを説き終え、全ての説法を終えた道君は「玉京」へと帰る。その際に、本経を世上に流布させることを再度確認する(所謂「附嘱」である)。

「明昌碑文」の内容は大凡以上の様なものであり、その内容展開に特に不自然さは感じられない。次に、これと大きく構成の異なる『道蔵』諸本だが、『無注』を基に確認しておくならば、本命真君の名号を唱えることの齋す功德を紹介した後、「明昌碑文」では後段に位置する持経が齋す功德を述べる一段が挿入され、その後に再度「明昌碑文」と同様に「本命」に関する記述が続く。文脈からすれば、「明昌碑文」の様に「本命」

に関する記述が続く方が一貫しているであろう。「南陵使者」の一段は『無注』では唐突に始まるが、「明昌碑文」の様に冒頭に「是経在処」の文字がある方が分かり易い。又、『無注』では「凡有上士於本命生辰、持此真文者、外伏魔精、内安真性、功沾水陸、善及存亡」の次に、「明昌碑文」では前段に位置する「悔過虔恭、漸登妙果、重立玄功、証虚無道」の句が挿入されており、文脈に連続性が無い。「明昌碑文」の最後に見られる附嘱に相当する一段は、『無注』では末尾よりやや前に位置し、「老君説経将畢、龍鶴天仙来迎、還於玉京」と説法を終えた老君が玉京に帰る際に天師が贊を説いている。「贊」と称されてはいるものの、その内容は家に「北斗経」が備わることの齋す功德であり、これは「明昌碑文」の様に「北斗真君応驗」と称される方がより相応しいと言えよう。

以上やや印象的な検証となったが、全体構成の点では「明昌碑文」の方がより妥当ではないかと一先ずは思われる。

二、諸本間の文字の異同

諸本間の文字の異同に就いては、『傳』には傳洞真が目撃した別系テクスト「二本」との校勘が記録されている。又、『若』の謝守灝「序」には、南宋当時既に字

句に混乱の生じていた『延生真経』（謝は「旧本」と称す）をより古いテクスト（謝はこれを「古本」と称す）に基づいて行った校訂作業が記されている。これらを併せて検討しておく。

全体的に見れば、『道蔵』所収三注釈の本文は『無注』と一致し、これら四種は同系である。又、「明昌碑文」と『外』は全体の構成が一致している点で同系と言える。しかし、それぞれ同系内で文字が完全に一致しているかと言え、それ程単純でもない。注意すべき異同を示すと次の様になる。

・明昌碑文	・太極宮 ・夷狄 ・多肆巧詐 ・北辰垂象 ・宣威科界 ・司陰府 ・訴訟 ・隔居	『外』	・太清宮 ・夷域 ・多諸巧詐 ・北辰在象 ・宣威三界 ・勾陰府 ・所誣 ・俗居	『無注』	・太極 ・夷狄 ・多肆巧詐 ・北辰在象 ・宣威三界 ・司陰府 ・訴訟 ・俗居	『傳』一本	・太清宮 ・夷域 ・北辰在上 ・宣威科戒 ・勾陰府 ・所誣	謝「序」旧本	・太清宮 ・夷域 ・多詣巧詐 ・北辰在象 ・宣威科戒 ・勾陰府 ・所訴 ・俗居
-------	--	-----	--	------	---	-------	--	--------	--

これらを見ると、謝「序」が指摘する「旧本」の多くは『外』と一致するが、しかし、『外』が「旧本」そのものであるとは断言出来ない。例えば、「宣威科戒」所訴」等は『外』よりも「明昌碑文」と一致するとすべきであろう。即ち、「明昌碑文」は構成の点では『外』と同系ではあるものの、文字の異同の点では、『道蔵』諸本及び「一本」「旧本」と併せて、様々なバリエーションの一つであると言えよう。

次に、「明昌碑文」の文句に就いて具体的に見ておく。「修斎設醮、啓祝、北斗三官五帝九府四司」の個所は、『道門科範大全集』巻五十九に「太上老君言、凡人性命五体」とほぼ同文が見られ、特に『道門科範大全集』の「降日為本命限期、可以種種香花、時新五果、法天像地、請正一道士、或於宮觀、或在家庭、修斎設醮啓祝」の個所は「明昌碑文」『外』の内容に近い。

「吾科善教、請正一道士一人或一、或二、或三、或五、或七」の句は『道蔵』諸本には見られないが、『太上洞神天公消魔護国経』巻下に「老君曰、……請正一三洞法師、或一、或二、或三、或五、或七人、随力建功、転誦此経、修斎行道、福德立降、消諸不祥」と見られ、『同』巻中にも「請正一三洞法師、或三人五人七人、或一日或三日、以時新五果……」と類似の文が見られる。

「北辰垂象」の句を『外』は「北辰在象」とし、謝「序」

はそれを「旧本」の誤りと指摘するが、審全真・林靈真（共に十二世紀の人物）等による『靈宝領教濟度金書』卷二百十九は「臣等謹按經云、北辰在上而衆星拱之」と引き、『道法会元』卷三十も「臣聞、北辰在上、為造化之枢機」と引いている。

「明昌碑文」の「呪曰、天靈節榮、確保□長」の句は『道蔵』諸本には見られないが、『徐』註が「呪曰、天靈節榮、願保長生、太玄之一、守其真形、五臟神君、各保安寧、急急如律令」と述べ、元末明初の『道法会元』に「天靈節榮、願保長生、太玄之一、守護真形、五臟神君、各保安寧、急急如律令」と類似の文が見られる。

「明昌碑文」『外』のみに見られる「三台生我来、三台養我来、三台護我来」の句は、宋代後半の撰と推測される『上天枢院回車畢道正法』卷上に「三台生我来、三台養我来、三台護我来」と見られ、明の『法海遺珠』に「三台生我来、三台養我来、三台護我来。急急如律令」と見られる。

「明昌碑文」『外』の「修崇、可以酌水」の句は、『道蔵』諸本では「修崇、能酌水」とあるが、『靈宝領教濟度金書』卷二百二十に「臣等按經云、可以酌水献花」と見られる。

「隔居」は『外』及び『道蔵』諸本が「俗居」とし、謝「序」は「隔居」を「旧本」の誤りと指摘するが、『上

清天枢院回車畢道正法』には「隔居小人、好道求真」と見られる。

「持此真怨」を『外』は「持此真經」とし、『道蔵』諸本にはこの句はない。又、「立罪」を『外』及び『道蔵』諸本は「章醮」とする。これらは『靈宝領教濟度金書』卷二百二十一に「臣等謹按經云、本命限期、可以消災懺罪、請福延生。持此真怨、随力立罪、福德增崇」と見られる。

更に、「明昌碑文」が「大聖北斗救□□□」と題して述べる一段は、『道門科範大全集』が「持大聖北斗救苦神呪」と題して載せる「大聖北斗七元君、能解三災厄。大聖北斗七元君、能解四殺厄。……大聖北斗七元君、能解刀兵厄。奉請七元君、大聖善通靈、濟度諸厄難、超出苦衆生。若有急告者、持誦保安寧、尽憑生百福、咸契於五星、三魂得安健、邪魅永能停。五方降真氣、万福自来並、長生超八難、皆由奉七星。生生身自在、世世保神清、善似光中影、応如谷裏声。三元神共護、万聖眼同明、無災亦無障、永保道心寧」とほぼ完全に一致している。この一段は『道蔵』諸本では「大聖北斗解厄応驗」と題され、謝「序」は「神呪」を「旧本」の誤りと指摘するのだが、『道門科範大全集』の引用から、「明昌碑文」と同様に「神呪」と題するテキストが流布していたことが知られる。

これ等の状況から窺えることは、宋・明の時期に在つて『延生真経』を引用する文献には「明昌碑文」「外」と一致する文句を引用するものが少なからず有つたといふことであり、謝守灝の校訂作業の後も、依然として「旧本」相当テクスト、即ち「明昌碑文」相当テクストが流通していたことが窺えるのである。更に留意すべきは、「隔居」「持此真怨」「立罪」等は『外』と『道蔵』諸本と一致していることから、『外』もまた後世の整理の手が加わっている可能性が残る点である。

無論、「明昌碑文」の字句に問題が無い訳ではない。例えば、「明昌碑文」「外」に見られる神格の名称表記にはぶれが有り、『無注』では「太上老君」「老君」「天師」と整理されている。又、「明昌碑文」に見られる「真形名号」の語は、文脈からすれば『無注』の「真君名号」と有る方が如何にも相応しい。

三、『若』について

次に改めて『若』について触れておきたい。謝「序」に依れば、北宋・政和と宣和年間、南宋・孝宗時期の二度に及ぶ杜撰な校訂作業の結果、テクストは却つて乱れてしまい、謝はその乱れた「旧本」を「古本」に基づいて正したとされる。

その「謝序」の内容だが、全体の構成に関して次の

様に述べている。

如初説北斗真君応驗、謂能解三灾四煞等二十四種厄、也却錯綴於卷後。至老君説経将畢、天師誓願流行、乃讚此経功、謂「家有北斗経」当獲「本命降真靈」等一十五吉祥、也乃錯綴於未曾説経之前。今各復其所。

「旧本」では、「能解三灾四煞等二十四種厄」を説く「北斗真君応驗」が誤つて後置され、「老君」が説教を終えた時点で「天師」が説いた「讚」が誤つて前置されていると見られる。この前後倒置の状況は上述した「明昌碑文」「外」と『道蔵』諸本との違いに相当するものだが、『道蔵』諸本相当の順が何故正しいのかの説明はなく、単に「古本」に従つたかの様である。又、その他の順の入れ替わりに就いては言及していない。

次に、字句の異同に関する記述だが、「旧本」の字句が誤りであることに就いて、謝は努めて論理的に説明しようとしている。例えば、

又将経中「老君曰」、尽改為「道言」、殊不知、太上道君所説、多称「道言」、如上清部中経及靈宝経所載、是也。太清部中、如天童経則称「太上曰」、清静経則称「老君曰」而已。応老君所説、未有称「道言」者、其改「老君説経将畢」為「道言説経将畢」、尤為非理。

「太上道君」の所説を「道言」と称することは有つても、「老君」の所説を「道言」と称することは道教文献には見られないため、「旧本」の「道」は「老君」と訂正されねばならないとする。又、

又改「本命真官」為「本命真聖」、改「真君名号」為「真形名号」。……能持念者、真君名号也。若真形則頂礼恭敬而已。不可持念也。

「持念」、即ち読み上げることが可能であるためには「真君の名号」でなければならず、「旧本」の「真形名号」は誤りであるとし、又、

又如「請正一道士」等語、亦後人増広耳。当老君下蜀時、初以正一授天師。元未有正一道士也。応經中有竄易増添不協理者。

本經は「正一」の教えを「天師」に伝授したものであり、その当時は「正一道士」は存在しなかったことから、「旧本」の「請正一道士」等の語句は後人が増補したものとす。

これらの見解は何れも根拠を示した上での訂正であり、なかなか論理的である。そして、これらは、「明昌碑文」「外」と『道蔵』諸本との違いにほぼ該当するものである。

結語

『本命延生經』は、天界の「大聖老君」が慈悲の心から衆生救済のために降臨し、「天師道陵」を相手に説法をし、説法を終え再び天界に戻る際に「天師道陵」に經典の流布を「附囑」するという内容である。首尾の形式が整った一卷という短い經典の流通が常態化するのは六朝以降のことであろう。又、「八難」に苦しむ衆生が自身が属する「本命」の「元君」と『北斗經』の神秘的力に依つて救済へと導かれるという、經典と神格による救済は、衆生自身の本来性に基づく得道とは次元が異なる発想である。その意味で本經は六朝期の道典に極めて類似し、道教經典としては古いタイプの形式と内容が継承されている。しかし、そのことが本經の撰述時期を六朝〜唐に限定するものでないことは言うまでもない。

謝守灝が参照したという「古本」の実像は不明である。状況証拠的には、「古本」を参照して「旧本」の誤りを正した結果が現行『道蔵』諸本の基礎資料として継承されたと考えられるのだが、謝の校訂作業が合理的思考に基づくものであったことを考えると、「古本」を完全に復元したと言うよりは、「古本」は参照資料に留めていたのではなからうか。つまり、「古本」にも見られたであろう非合理的な表現、或は謝の理解する道教史

と合致しない字句等に就いては敢えて参照しなかったのではないか。謝の校訂作業の後も「明昌碑文」「外」相当経文が引用されていたことは、「旧本」が一掃された訳ではないことを示し、「古本」の全体像を確認出来ない現在、当時の状況を窺うことの出来る史料として「明昌碑文」は大きな意味を持つものと言えよう。

金朝初・中期の道教研究は、伝世文献資料のみの使用では限界にきている。そのため、中国では石刻資料等が積極的に用いられている。それ自体は歓迎すべきではあるが、石刻資料は極めて個別・断片的であるため、伝世文献資料との周到緻密な突合せなくしては、その背景を理解するのは困難である。それを顕著に示している点でも「明昌碑文」は重要と言えよう。

(注)

(1) 『道蔵』は『太上玄霊北斗本命延生真経』(以下『無注』と略す)、徐道齡集註『太上玄霊北斗本命延生真経註』(以下『徐』と略す)、崆峒山玄元真人註解『太上玄霊北斗本命延生真経註解』(以下『崆』と略す)、傅洞真註『太上玄霊北斗本命延生真経註』(以下『傅』と略す)を収め、『蔵外道書』は『太上玄霊北斗本命延生真経』(『蔵外道書』第三冊所収。以下『外』と略す)を収める。「若杉家文書」所伝(以下『若』と略す)に就いては、三浦国雄「若杉家本『北斗本命延生経』について」(『東方宗教』一一三二号、

二〇一四年)を参照。『道蔵』諸本に就いて、蕭登福「太上玄霊北斗本命延生真経」探述」(『宗教学研究』一九九七年第三期)は、『無注』を後漢、『徐』を元代、『崆』を唐代、『傅』を宋代の撰と推測する。鄭志明「『太上玄霊北斗本命延生真経』的星斗崇拜」(潘崇賢・梁発主編『道教与星斗信仰』所収。齐鲁書社、二〇一四年)は、『無注』を唐代までの撰、『徐』を元代、『崆』を元々明代、『傅』を五代々北宋の撰と推測する。三浦論文は、『徐』は元代の撰、『崆』は南宋以降の撰であろうとした上で、『傅』↓『徐』↓『崆』という順を想定する。

『傅』注文には「天心正法驅邪」の語が見られることから北宋をさほど遡るものではないであろう。又、『延生神経』の日本に於ける受容に就いては、坂出祥神・増尾伸一郎「中世日本の神道と道教―吉田神道における『太上玄霊北斗本命延生真経』の受容―」(酒井忠夫・福井文雅・山田利明編『日本・中国の宗教文化の研究』、平河出版社、一九九一年)を参照。

(2) 例えば、杜光庭刪定・仲勳編とされる『道門科範大全集』、南宋・呂太古編『道門通教必用集』、南宋から元の林霊真の編集を承けて明代に編纂されたと思しき『靈宝領教濟度金書』、元末明初に趙宜真によって編纂された『道法会元』等が本経を引用する。特に『道門科範大全集』巻五十五〜六十二、『靈宝領教濟度金書』巻二百十九〜二百二十一に「北斗」に集中的に言及し、本経を度々引用している。詳細は上記『道教与星斗信仰』所収諸論、及び三浦論文を参照。

(3) 三浦論文は、謝守灝の校訂作業の一つとして、「家有北斗経」十五連句《前》と解厄二十四連句《後》の誤置の入れ替え」のみに言及するが、全体の構成の違いはこれに留まるものではない。

(4) 尚、「明昌碑文」、「若」の何れも現物を論者は未見であり、その内容に就いては、『道家金石略』及び三浦論文に依拠している。

(5) 『道門科範大全集』は五代・杜光庭の整理を基に、南宋或は明の人物・仲勛によって編纂されたとされる。任継愈『道藏提要(修訂本)』(中国社会科学出版社、一九九五年)は明・成祖以降の著述が含まれているとし(p.966)、それを踏まえ、周西波『杜光庭道教儀範之研究』(新文豊出版公司、二〇〇三年)は全体として杜光庭の分類編纂の体裁と合致しない点から、「杜光庭刪定」と記されている巻に就いてもその杜光庭の関与を疑問視する(pp.44～45)。一方、孫亦平『杜光庭評伝』(南京大學出版社、二〇〇五年)は「杜光庭刪定」と記されている部分は杜光庭の著述と見做し得るとする(p.97)。

(6) 本文献の撰述時期は不明である。

(7) 本文献の撰述時期を Kristofer Schipper & Franciscus Verellen : 道藏 通考 *The Taoist Canon : A Historical Companion to the Daozang*. The University of Chicago Press, 2004 年「恐らくは宋代後半」(p.1068) と推測する。

(8) しかし、『靈宝領教濟度金書』が「臣等謹按經云、於是真形名号、不可得聞」と「明昌碑文」と同文を引用する例も確認出来る。

(9) 拙著『唐初道教思想史研究—『太玄真一本際経』の成立と思想—』(平楽寺書店、一九九九年)を参照。前掲鄭氏論考も「此経述太上老君向天師授道、是六朝正一经常見的格式」(p.636 注①)と述べた上で、「其成書時間大約不晚於唐代」(同)と撰述時期を唐以前と推測するのも、同様の理解に立つものと思われる。

(10) 六朝～唐の道教文献に見られる「八難」に就いては、拙稿「六朝から唐の道教文献に見られる夷狄と外道」(麦谷邦夫編『三教交渉論叢』所収。道気社、二〇〇五年)を参照。

(11) この点は、例えば『傳』が北斗・北辰信仰と本命の概念を軸とした天人相関を基礎としつつも、それを北斗の神の存思・内観と解釈した上で、「性相之根本、登真之門戸」、「大定之便門」と総括し、衆生自身の問題と関連付けているのとは大きく異なる。

※本論は、平成二十八～三十年度科研費「金朝初・中期道家道教思想の解明」(課題番号：16K02159)の成果の一部である。

※本論脱稿の後、李建徳『北斗経』注本之生命哲学探析—上—(『武廟』十二、二〇一七年)が刊行された。李氏は『傳』を北宋～南宋初の撰『徐』は一二三四年に完成した後も加筆され、『崆』は宋代の撰とする(pp.17～19)。